

## 令和7年度 愛知医科大学大学院看護学研究科 海外研修報告書

氏名	看護学研究科 臨床実践看護学領域 森部咲貴	研修先	シンガポール国立大学
学年	1学年次生	研修期間	2026年3月14日～3月21日
主な研修内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シンガポール国立大学内見学 (Centre for Healthcare Simulation、Anatomy Museum 等)</li> <li>・ナーシングホーム、高齢者デイケア、Harmony in Diversity Gallery 見学</li> <li>・大学院講義への参加 (APN Masters class)</li> <li>・病院訪問 Changi General Hospital</li> </ul>		
報告内容	<p><b>1 志望理由と研修での具体的な学びについて</b></p> <p>(1) 志望理由</p> <p>私が今回の海外研修を志望した動機は、大きく2つある。第一に、シンガポールの高度実践看護師であるAPNがどのように育成され、実際の臨床現場でどのような役割を果たしているのかを知りたかったためである。第二に、臨床経験を経て大学院生になった今、狭くなりがちな視野を広げ、多角的に医療や看護をとらえる機会を得たいと考えたためである。私は学部生の頃にも同様のプログラムで米国CWRUを訪問した経験があるが、今回は臨床を経験したからこそ、当時とは異なる視点からの学びがあったと感じている。</p> <p>(2) 学んだこと</p> <p>今回の訪問でまず印象的だったことは、シンガポールの文化・民族・宗教の多様性である。街を歩いているだけでもそれを肌で感じることができた。建物の様式や話している言語、街に点在する宗教施設、ホーカー(屋台)や学食で提供されている食事など、あらゆる場面にそれが現れていた。日本は比較的、単一民族国家であり宗教や文化の違いを日常的に意識する機会は多くはない。そのため私自身、これまで他者の宗教的背景や価値観について深く考える機会は、ごく限られたシチュエーションのみであったと思う。</p> <p>医療、特に看護の場においては、対象者の価値観や考え方を尊重するということが極めて重要である。今回の研修で、宗教的多様性の理解を促進するための国の施設に訪問させていただく機会があった。隣に住んでいる人と、信じている宗教が異なることが原因で起こってしまった、昨今の世界情勢にも通ずる諍いの歴史を学んだ。多様性が叫ばれる現代、この言葉にもずいぶん手垢がついてきたように思うが、まさに多様性を尊重するというこの本質的な理解が問われていると感じた。相手が大切にしている文化や信じているものを尊重するとはどういうことか、改めて考えさせられた。本当の意味で他者を理解し、尊重するためには、相手について深く知りたいという姿勢を持ち、対話を重ね、互いに理解しようと努力することが必要である。言語の面でもそうだ。日本では、ほとんどの国民が日本語を話して生活しているが、シンガポールでは母語が異なることは当たり前であり、多くの人が複数の言語を自然に使いこなしていた。このような環境に短期間でも身を置いたことで、看護師として多様性を前提として相手と関わる姿勢の大切さを改めて考えることができた。</p> <p>また、今回の研修ではAPNと個別に深く対話する機会は限られていたものの、英語で自分の研究計画を発表するという貴重な経験をすることができた。自分の考えていることを母語ではない言語で相手に伝えることの難しさを実感すると同時に、準備を重ねることで伝えられるという自信にもつながった。さらに、私たちと同じように高度実践看護師を目指す学生が世界にも多くいること実際に見ることができた。住んでいる国は違っても、仲間がいると感じられたことは、自分への励みとなった。今回の研修は、知識を得るだけでなく、自身の視野を広げ、今後の学びへの意欲を高める貴重な機会となった。</p> <p><b>2 海外研修への参加を考えている学生へのメッセージ</b></p> <p>海外研修は、語学力だけでなく、自分の凝り固まった価値観や視野を大きく広げてくれる貴重な機会だと思います。ありきたりかもしれませんが、日常から離れることで自分の生活しているところが世界の全てではないと体感することができます。不安ももちろんあると思いますが、実際に現地に行ってみることでしか得られない学びや出会いがあります。語学に自信がなくても、挑戦してみようという気持ちがあれば大丈夫です。少しでも興味があるなら、ぜひ参加してほしいと思います。</p>		



## 令和7年度 愛知医科大学大学院看護学研究科 海外研修報告書

氏名	看護学研究科 臨床実践看護学領域 大溝那奈	研修先	シンガポール国立大学
学年	2学年次生	研修期間	2026年3月14日～3月21日
主な研修内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学内の施設（シミュレーションルームや解剖のライブラリーなど）の見学、授業（大学生）への参加</li> <li>・高齢者福祉施設、病院の見学</li> <li>・修士課程（APN）の大学院生の講義に参加、研究計画のプレゼンテーション</li> </ul>		
報告内容	<p><b>1 志望理由と研修での具体的な学びについて</b></p> <p>(1) 志望理由</p> <p>本大学院を志望した理由の一つが海外研修の機会にあります。1年時にアメリカでの研修で米国の医療・看護を学びましたが、今回は日本と同様に高齢化が進み、似た課題を抱えるシンガポールに関心を持ち、その医療・看護の特徴や課題を学びたいと考え志望しました。また海外研修では英語で研究発表を行う機会があり、挑戦するとともに助言を得て研究を深めたいと考え希望しました。</p> <p>(2) 学んだこと</p> <p>本研修では、大きく2つの学びを得ることができました。</p> <p>1つ目は、「Music and Humanities in Community Elder Care」という講義での学びです。音楽（ダンスや楽器演奏、歌）を通して参加者同士が関わる中で、言語や文化、年齢、考え方の違いを越えて一体感が生まれる場を体験しました。言葉によるコミュニケーションに頼らなくても人と人がつながることができるという実感は新鮮であり、非言語的な関わりがケアにおいて重要な役割を果たすことを学びました。特に高齢者看護においては、認知機能の低下などにより言語的なやり取りが難しい場面も多く、音楽のような手段を通して関係性を築いたり、残存機能を引き出すことやリハビリテーションとしての効果、記憶を呼び起こす認知的刺激としての側面もあり、看護と大きく結びついていることを実感しました。</p> <p>次に、研究発表での学びです。修士課程の学生や教員総勢50名以上の前で英語による発表を行いました。英語で伝える難しさはありましたが、学生や先生方が真剣に聴いてくださり、反応を示してくださる中で、自身の研究が海外でも伝わることを実感し、それが自信につながりました。さらに、発表後に頂いた反応や助言を通して自身の研究を客観的に捉え直し、研究をより良くしていくための視点をすることができました。また、前回の発表と比べて、今回は時折前を見て聴衆の反応を確認しながら発表することができ、自身の成長を実感しました。</p> <p>これらの経験から、言語の壁があっても、関わろうとすることや挑戦することが学びや成長につながると実感しました。また、シンガポールでの研修を通して、ケアの在り方だけでなく、研究者としての姿勢についても考えを深めることができました。</p> <p><b>2 海外研修への参加を考えている学生へのメッセージ</b></p> <p>海外研修は英語が話せる人だけが行くものではなく、英語が話せなくても、上手く伝えられなくても、一歩踏み出した人にこそ得られる経験だと思います。英語や費用に不安はあると思いますが、実際に現地ですぐに得た学びや出会いは、それを上回る価値がありました。上手く話せなくても伝えようとするだけで、新しいつながりや学びが生まれます。限られた大学院の時間の中で、自分の視野を広げ、自分の可能性に気づくきっかけとして、挑戦する意味は大きいと感じます。ぜひ、一歩踏み出してみてください。</p>		



## 令和7年度 愛知医科大学大学院看護学研究科 海外研修報告書

氏名	看護学研究科 臨床実践看護学領域 田原健成	研修先	シンガポール国立大学
学年	2 学年次生	研修期間	2026 年 3 月 14 日～3 月 21 日
主な 研修内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ Nursing University Singapore (以下 NUS) での master class 授業への参加、課題研究発表</li> <li>・ 解剖博物館、シュミレーションセンター見学</li> <li>・ シニアケアセンターでのレクリエーション参加</li> <li>・ changi general hospital の院内見学</li> </ul>		
報告内容	<p><b>1 志望理由と研修での具体的な学びについて</b></p> <p>(1) 志望理由</p> <p>本プログラムに参加した理由は、海外での研究発表の機会を得るとともに、他国における医療の実情や制度への理解を深め、自身の視座を拡張し、今後の実践に活かす契機とするため参加を志望いたしました。</p> <p>(2) 学んだこと</p> <p>National University of Singapore (NUS) の Master Class では、Advanced Practice Nursing (以下 APN) 専攻の大学院生が共通科目として受講しており、胸部痛および逆流性食道炎のマネジメントに関する講義に参加させていただきました。疾患の鑑別や治療マネジメントの考え方を一方的に学ぶだけでなく、学生との双方向的なディスカッションを通じて進められ、学生は積極的に発言し、主体的に学習へ関与している姿が印象的でした。また、異なる専門領域の APN 学生が約 50 名規模で共通授業を受講している点は、日本との教育体制の違いとして興味深いものでした。</p> <p>Changi General Hospital の見学では、シンガポール東部地域の中核病院としての役割を担っており、約 1,000 床の病床を有し、約 25 名の APN が臨床で活動していました。院内では業務の効率化を目的とした自動化が進んでおり、配膳ロボットによる食事提供や、薬剤の自動ピッキングシステムなどが導入されていました。さらに、理学療法の一環としてハイドロセラピーが実施されており、脊髄損傷などにより麻痺を有する患者に対して水の浮力を活用したリハビリテーションが行われていました。これにより運動負荷を軽減しながら機能回復を促進し、歩行能力の改善につながった事例が報告されている点が印象的でした。</p> <p>シニアケアセンターでは、高齢者の方々がレクリエーション活動に参加されており、私自身もその一環として活動に参加させていただきました。言語が十分に通じない場面もありましたが、ジェスチャーや表情、仕草を通じて意思疎通を図ることができ、利用者の方々から笑顔や積極的な反応が見られたことが非常に印象的でした。これらの経験を通して、言語的コミュニケーションに依存しない関わりの重要性を実感するとともに、相手の立場や感情に寄り添う姿勢がケアの質に大きく影響することを改めて認識いたしました。また、文化や言語が異なる環境においても、対象者との信頼関係の構築や安心感の提供といった看護の本質は共通していることを再確認することができました。</p> <p>今回、シンガポールは初めて訪れましたが、多国籍な人々が共存し、多様な文化を相互に尊重しながら生活している社会であることが強く印象に残りました。異なる宗教や価値観を背景としながらも社会全体として調和が保たれており、その基盤には制度や教育による支えが存在していると考えられました。このような多文化共生社会の在り方は、医療・ケアの提供においても重要な視点であり、対象者の文化的背景を踏まえた関わりの必要性を改めて認識しました。本研修で得られた学びは、今後の実践において文化的多様性を尊重したケアを実践していく上で重要な示唆を与えるものであったと考えます。</p> <p><b>2 海外研修への参加を考えている学生へのメッセージ</b></p> <p>私は今まで短期留学のようなプログラムに参加したことがありませんでしたが、今回、本プログラムに参加して大変良い経験ができたと感じております。大学院生として日本で行った研究を海外に発信することは重要であると考えており、実際に海外で発表できる機会を持つことができるのも貴重な体験であったと感じております。この機会を活かし、今後は国際学会での発表なども行っていきたいと思います。言語のハードルはありますが、同じ仲間と貴重な経験ができるチャンスですので、是非参加してみてください。</p>		

